哀れなるものたち

POOR THINGS (2023) "WHO WERE THE POOR THINGS?"

監督：ヨルゴス・ランティモス

あまりにもエマ・ストーンが圧倒的存在であるために短い批評やコメント等では言及されないかもしれない彼女を取り囲む俳優たちだが、やはりこの作品は"女"と対比する"男"なしでは語れないし、ウィレム・デフォーやマーク・ラファロをはじめとした素晴らしい俳優たちなしではこれほど厚みのある作品にはなりえなかったと思う。

天才外科医によって蘇った若き女性ベラは、未知なる世界を知るため、冒険に出る——。

GOD

天才外科医ゴッドウィンを演じるウィレム・デフォー。『処刑人』の衝撃は今も忘れられないし、『永遠の門ーゴッホの見た未来ー』では、ゴッホ以上にゴッホだった。【苦悩】を演じるために生まれてきたような俳優であり、そのあまりの存在感にいつも彼から目が離せない。

原作小説はアラスター・グレイ氏の著書『哀れなるものたち』。

『アルジャーノンに花束を』や『ピグマリオン』(ギリシャ神話のほう)を彷彿とさせつつも、むしろそれらを昇華したものであるかのような痛快で見事な作品!

BELLA

完全なる一人勝ち!✨エマ・ストーン演じるベラ。ベラは彼女以外考えられないと思わせるほどの説得力だった。この作品で彼女はプロデューサーとしても名を連ねていることにも納得できる。

OW

放蕩者の弁護士ダンカンを演じるマーク・ラファロ。かつて私は、『死ぬまでにしたい10のこと』を観てすっかり彼の沼にはまってしまい、『キッズ・オールライト』等の作品も好き!彼はなぜかいつも色気に満ちている。

初めてこの映画の予告を観たときには、マッドサイエンティスト的な役柄をウィレム・デフォーが演じることは予想できたとしてもマーク・ラファロもキャスティングされているのを見て、「なんとも憎いキャスティング〜!!」と唸った。

MAX

ゴッドウィンの教え子マックスを演じたラミー・エセフ。予告編を見た時には正直、まったく別の俳優さんと勘違いしていた(のは私だけではないはず…)。が、彼のある意味ベラ以上に実直で純粋なキャラクターが絶妙な演技で表現されていた。

音楽はUKの気鋭ジャースキン・フェンドリックス。…これってBGM?それとも効果音なの??と映画の冒頭から惹きつけられた。主人公ベラのおぼつかない歩き方などその一挙一動とリンクするように不器用で不協和音のような音で始まるのに、彼女の成長とともに音は音楽となっていく。『メッセージ』のドゥニ・ヴィルヌーヴ監督とヨハン・ヨハンソンの音楽のペアリングのような、中毒性を伴う芸術性。とにかくベラとの相性が素晴らしかった!
途中のダンスシーンで、バンドメンバーとして奇妙な楽器を演奏していたのが、彼本人である。

荘厳で目を見張るほど異質な美術や衣装の数々がたまらなく魅力的で美しかった。

← このシーンで、ベラが背を向けて立っている建物の窓がどう見てもアレのカタチになっている。これが意味すること、それは…

『哀れなるものたち』についてはもう一つの映画感想文の方でさらに深く掘り下げているのでそちらもぜひ!